

## 第二編

# 長野県松本地域調査報告

## 桔梗ヶ原のブドウ栽培

佐々木 博

### I はじめに

ローカルワインが輸入ワインと並んでスーパーなどにも陳列されるようになってきた。山梨県と並んでローカルワインの種類が多い長野県塩尻市桔梗ヶ原のワインについて、ブドウ栽培のあゆみ、農業構造、ワイナリーの実状を調査報告するのが、本報告の目的である。

### II 長野県のブドウ栽培と桔梗ヶ原

#### II-1 長野県および桔梗ヶ原のブドウ栽培の地位

長野県の1982年のブドウ園面積は2,280haで全国の7.5%を占め、山梨(6,160ha)・山形(3,550ha)に次いで第3位にある。ブドウ園面積は1950年当時243haで岡山に次いで第5位にあったが1960年に大阪を抜いて第4位に、1975年に岡山を抜いて第3位に浮上した。しかし、1975年の2,520haをピークに以後漸減気味である。長野県のブドウ収穫量は23,900t(1981)で全国の7.7%、出荷量は22,400tで7.8%を占め、山形県に次いで全国第3位であった。しかし、加工用ブドウは4,189tで全国の14.2%を占めて山梨県に次いで2位にある。長野県は加工用ブドウ生産率が高いことに特色がみられる。1981年長野県のブドウ粗生産額は83.1億円で山梨(297億円)・山形(90億円)・岡山(83.3億円)に次いで第4位であった。

長野県の果樹作付率(1981)は13.0%で、全国のそれ(7.5%)の1.7倍、果樹作の盛んな県である。長野県の果樹の筆頭は青森(25,000ha, 1982)に

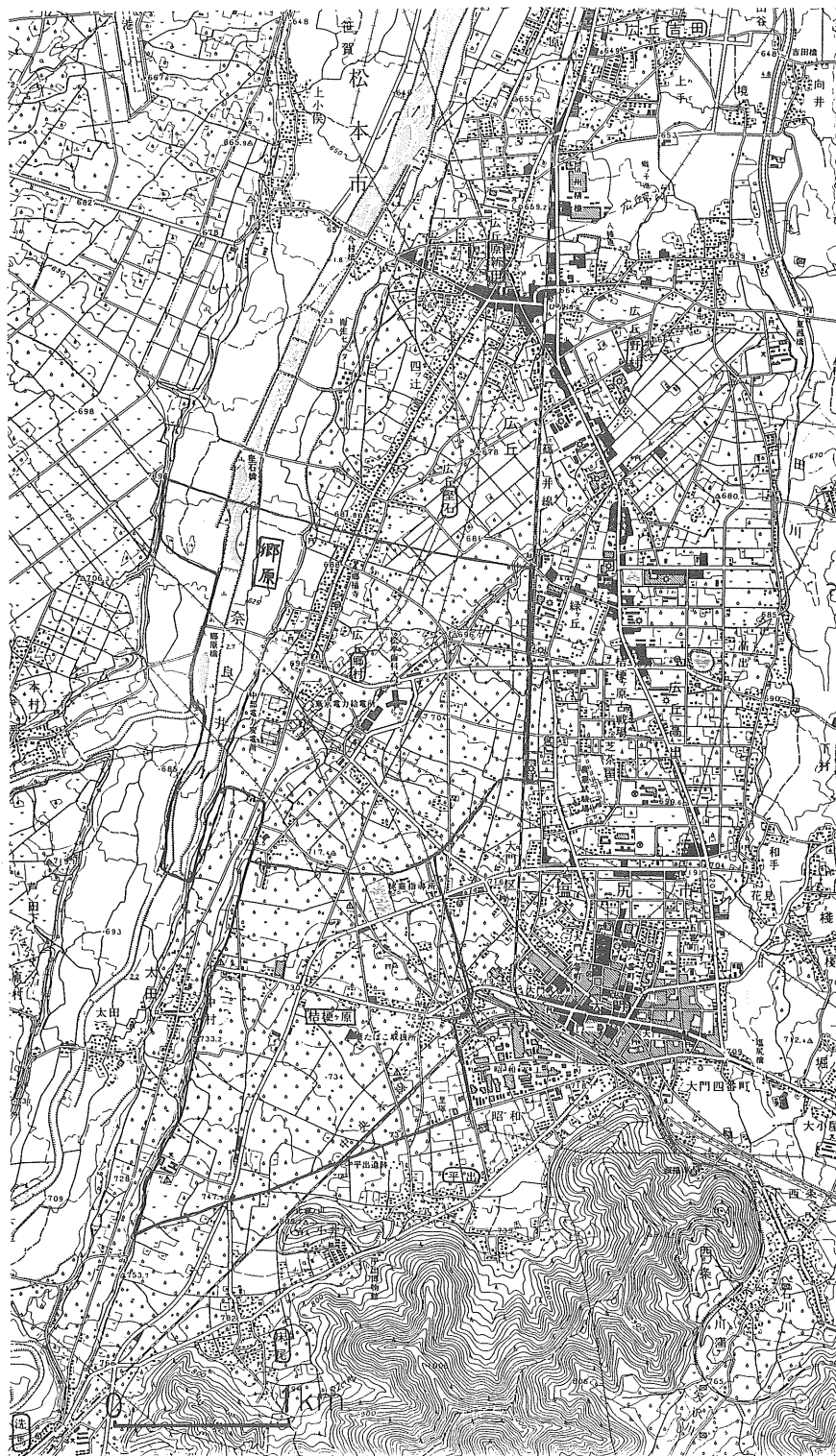
次ぐリンゴの10,800ha、2位は福島・山梨に次ぐモモの2,230ha、3位がブドウの2,210haで、4位のナシは1,380haである。

長野県のブドウ栽培地域は大きくは松本盆地と長野盆地の2つである。1980年農林業センサスの長野県ブドウ園面積2,068haのうち、塩尻市367ha(全県の17.7%)・松本市317ha・須坂市206ha・中野市173haと4市で県全体の51.4%と過半数を占めている。松本平南部のブドウ栽培地域の核心部は桔梗ヶ原で、南は中央線洗馬<sup>せば</sup>駅から北は篠ノ井線広丘駅の東方、奈良井川と田川との間に紡鐘形に広がる約480haの洪積台地である。桔梗ヶ原は行政的には塩尻市にあり、1959年塩尻市誕生以前は南半部は宗賀村、北半部は広丘村、東部は塩尻町大門にわたっていた。

塩尻市の総農家4,729戸(1980)のうち27.0%に当る1,276戸がブドウを栽培している。このブドウ栽培農家率27.0%は長野県最高で2番目の中野市19.5%よりずっと高い。しかし、温室ブドウ面積は中野市が県全体65.4haの38.6%を占めるのに対して塩尻はわずか5.6%(3.7ha)に過ぎず、2位の須坂市23.3%(15.2ha)にとっても及ばない。塩尻市のブドウ栽培は加工用ブドウの露地栽培に特色がある。

#### II-2 桔梗ヶ原の開拓とブドウ栽培

江戸時代に桔梗ヶ原と呼ばれたところは、西の奈良井川、東の田川に挟まれた南北三里、東西二里の相当広い範囲を呼んでいた(第1図)。標高は南西端洗馬駅付近で770m、北東端の田川の沖積低地に接する丘中学付近で670m、傾斜1/70と



第1図 桔梗ヶ原・郷原

ほとんど平坦面をなしている。南端部の平出遺跡はあるものの、この桔梗ヶ原は地下水が深い扇状地性台地であり、土がPH 4.5～4.8の相当強い酸性を示し、近世には周辺9カ村（大門・平出・床尾・郷原・堅石・原新田・吉田・野村・高出）の入会秣場であり、また周辺宿場の助郷のための馬糧源として必要とされたことなどから、開墾が遅れた。9カ村のうち郷原は中山道の洗馬宿から分れる北国街道の宿場として発達し、今日もその街村形態に宿場の面影を止めている。原新田は江戸時代になって成立した新村である。

松本藩はしばしば桔梗ヶ原を開墾しようとしたが、その度に農民の秣場と薪炭採取地を失うという理由で反対されてきた。しかし幕末期に人口圧が増すと平出村、床尾村などの住民が原を切添的に隠畑として開墾していった。平出村川上弁弥が中山道筋に葉草栽培を始めると、多くの農民も追随し、当帰・黄芩・茴香ういきょう（せり科の多年草、実の油は香味料・薬用）などの葉草を栽培したので、中山道の旅人の鼻をついたという。112年前の明治5年（1872）平出村の田中勘次郎が今日の塩尻駅南西1kmの桔梗ヶ原公民館付近の開墾に着手した。同年官民有区分が行われ、桔梗ヶ原周辺9カ村に5～10町ずつ、10年で新開拵下りとなった。官有地となった中央部100町歩は一般人に入札拵下りが行われ、10月南安曇郡高家村内田聡英他5人が1,000円で落札した。10年で拵下りではあったが、10年経た明治14年（1881）には僅か9町5畝が開墾され、19名が入植したに過ぎなかった。そのため開墾し残された90余町は再び官有地に編入されてしまった。この官有地は明治18年（1885）宗賀・塩尻・広丘の3戸長役場に分属された。宗賀村では床尾・平出両集落に分けられた土地は、さらに個人に分けられた。平出では1区画ほぼ1反2畝に仕切られて整然としていたが、床尾は大小多様に区画され、岩垂三朗の所有地が多かった。本格的開墾が行われたのは金肥の導入の行われた明治後半からであった。

94年前の明治22年（1889）豊島理喜治が実兄高山寿太郎・友人山崎与作らと共に桔梗ヶ原に土地

を求め（現在の堀川農園）、1町歩を開墾してコンコード200本を植え、翌年20余種、3,000本を栽植したのが、今日のブドウ郷の始まりであった。理喜治は明治3年（1890）東筑島内村小宮で高山拓三の次男として生まれ、明治12年里山辺村小松（旧制松本高等学校、現あがた公園付近）豊島新三郎の養子となった。同年祖父が旧松本城本丸内にあった筑摩県勸業寮から数種の外国種ブドウの苗を得て小松の自宅で栽培したところ、うまく結実した。また輸入ワインの急増をみて大町方面で山ブドウを採取してワインを製造した。量不足をカバーするため栽培ブドウ品種の苗を明治22年（1889）群馬県妙義山々麓の小沢善兵衛のところで求め、同時に小沢農園に研究生として入園して、栽培法や醸造技術を習得し、翌年秋帰郷して里山辺村に持ち帰ったジンファンデル・ハートフォード・ナイアガラ・イザベラ・ムアースダイアモンド・コンコードなどの品種300本を植え、明治23年（1890）に結果をみた。とくに米国種のコンコードとナイアガラはよく育ち、栽培が容易であった。ブドウ園も5町に拡大し、収穫ブドウは醸造の他生食用としても販売された。豊島氏はこの果樹園の拡張を機に里山辺村にあった家作田畑をあげてこの事業に投入し、明治30年（1897）醸造倉庫を建設した。

1903年理喜治は有志とはかり、資本金5万円で信濃殖産株式会社を創立し、ブドウ園を12町歩としたが、金融関係の破綻から1907年解散し、しばらくは桔梗ヶ原に止まった後、松本市城山に移って1934年に没した。彼はブドウのみならず、桃・和梨・洋梨・桜桃・荳果などの落葉果樹を導入した。1969年豊島理喜治頌徳碑が桔梗ヶ原総合グラウンドの一隅に建てられた。

明治41年（1908）諏訪から入植した小泉八百蔵が7反歩の土地（現有賀農園）へコンコードを植えた。これまではヨーロッパ式の垣根〔塀〕作り、あるいは杭作りであったが、小泉が初めて甲州の栽培法である棚作りを用いた。これは従来の垣根作りに比して高さが高いため霜害が少なくなった。また彼は馬を飼って堆肥を作って施肥し始

め、後に過燐酸石灰が出回るようになって作物がよく育つようになった。

大正期に入って養蚕を目的として入植した人々の桑園はブドウ園と化していった。明治44年(1911)諏訪から入植した林五一は土地を買収して大地主となり、雇傭労働に依存して果樹園を経営した。自ら農事試験場に出かけ園芸技術の習得に努め、1919年にワイン醸造を始め、「鷹の羽ポートワイン」と命名されていた。1969年果樹振興に対する功績によって黄綬褒章を授けられた。

大正期末頃5年間は桔梗ヶ原への移住者の最も多い時期であると同時に、転出者も多く異動が激しかった。1927年頃はブドウの栽培面積は塩尻・宗賀合わせて100haを越え、宗賀63%、塩尻33%、広丘4%であった。品種ではコンコード7割、デラウェア2割、ナイヤガラ1割の比率であった。1930年頃は諏訪・木曾あたりの商人が入り込んで買ったたいては生果として出荷していた。

醸造所としては1919年の林五一に続いて1927年アルプス葡萄酒醸造所、1930年霧ヶ峰葡萄酒醸造所、1932年有志十数名によって「信産社」および太田葡萄酒、1933年井筒屋葡萄酒醸造所などのワイナリーが続々誕生した。1936年林五一らの誘致運動によって寿屋〔サントリー〕ワイナリーを朝日街道沿いに誘致して、多量のコンコードの処理を可能にした。工場と生産者の間で、「向う三カ年 各年10万貫を 1貫目13銭とする」契約が成立した。ブドウ栽培者に漸く安定した販路が開かれた。

2年後の1938年大黒ブドウ酒〔現三楽オーシャン〕が現在地に建てられた。1940年頃は県内消費用の生食ブドウを除いては、ほとんどが醸造用として販売されるようになった。第2次大戦中は酒石酸採取のために品種のいかんを問わず、すべて同一価格で引きとられるようになった。そのため相対的に収量も多く、栽培し易いコンコードへ切換える者が多くなった。しかし戦中は肥料も逼迫し、配給制ではほとんど無肥料の状態で作られたので、栄養不足で枯死する木が続出した。戦後1946年の第一次農地改革と1974年自作農創設特

別措置法の改正による牧野(林地以外の放牧地と採草地)の解放が追加され、林七六(岡谷)・瀬黒幸一(寿)の不在地主、林五一の在村地主の農地が解放され自作農が造成された。同時に引揚者が入植開拓し、5年後の1951年には入植者76、開墾面積92町歩となり、開墾地の多くにブドウが植えられた。戦前のブドウ園約150haは塩尻、宗賀地区に限られていたが、戦後の広丘開拓によって面積は一挙に拡大し、1962年には果樹栽培面積320ha、うちブドウ220ha(63%)、リンゴ47ha(15%)、梨40ha(13%)、桃14ha(4%)となった。

### Ⅲ 桔梗ヶ原のブドウ栽培の経営構造

#### Ⅲ-1 ブドウ栽培農家の経営類型

塩尻市の1980年総農家4,729戸の経営類型を農林業センサスによってみると、果樹単一経営(農産物販売金額1位部門の販売額が総販売金額の8割以上を占める経営)は9.6%、県(8.7%)よりは高いが須坂市(48.5%)・中野市(27.4%)よりはるかに低い。果樹が主の準単一経営(農産物販売金額1位部門の販売額が総販売金額の6割以上8割未満を占める経営)は4.5%、県(4.1%)よりは高いが中野市(13.0%)・須坂市(9.6%)よりは低い。果樹単一経営、および果樹が主の準単一経営を合わせた果樹重点経営の割合は14.1%、県(12.8%)よりは若干高いものの須坂市(58.1%)・中野市(40.4%)よりはずっと低い。

旧宗賀村の農業集落桔梗ヶ原(第1図)についてみると、1980年の総農家数97戸のうち果樹単一経営は72戸、74.2%で4戸に3戸が果樹単一経営、農産物販売金額第1位の部門が果樹である農家が91戸、93.8%である。この比率は1970年86.7%、1975年76.8%と比べても過去最高であり、桔梗ヶ原の果樹専作的性格が表われている。これに北隣する農業集落、旧広丘村郷原は農家率50.5%(1980)で桔梗ヶ原の32.1%よりは高いものの、159農家のうち果樹単一経営は38戸、23.8%、農産物販売金額で果樹を第1位の部門とする農家が57.9%とやはり過半を占めている。この比率は1970年47.2%、1975年66.5%に比べ1975年をピーク

に減少したが、代って野菜を農産物販売金額第1位部門とする農家が1975年の20戸から1980年には35戸へ急増し、果樹に代って野菜化の傾向が伺える。

塩尻市の人口は52,711人(1980)、人口密度305とほぼ日本の平均に近いが、農業就業者率は21.1%と日本の倍近くあって農業的色彩が未だ強い。人口増加は桔梗ヶ原北半部、旧広丘村で大きく、松本市のコナーベーション化が国道19号に沿って南下しているため、広丘地区は1975年から80年の最近5年間に3,651人、24.8%の人口増加を示した。1960を100とする1980年の耕地比は73.1農家当り耕地比は80(86aから69aへ)、田比は90であるのに果樹比は62と急減し、桑園比となると7でほとんど全滅した。レタス等野菜の生産は急増し、出荷最盛期には長野県内産野菜の1/4を占める程になった。

1981年塩尻市農業粗生産額のビッグスリーは野菜56億円、果実14億円、米14億円で、この3部門で農業総粗生産額103億円の81.9%を占めた。果樹栽培面積562ha(1981)の内訳は、ブドウ65.8%、リンゴ11.6%、日本梨10.9%、桃5.0%であり、果樹の約7割はブドウであった。稲・果樹の作付面積が減少していくのとは逆に、野菜の作付面積は急増してきており、それにともなって野菜の粗生産額も増大している。1968年当時野菜の作付比率は18.7%、粗生産額比率は27.9%であったが、13年後の1981年には作付比率46.1%、粗生産額比54.7%と農業粗生産額の過半を占めるようになった。同期間に果樹の作付比率は15.1%から13.3%へ、農業粗生産額は19.2%から13.7%へと減少している。同じく同期間に米の作付比率は23.1%から20.4%へ、粗生産額比は27.9%から13.5%へ半分以下に減少した。

塩尻駅北約1kmにある長野県中信農業試験場観測の1951～80年の30年間の平均降水量は1,280mm、平均気温11.0℃、甲府のそれ(1,129mm、13.6℃)と似た数値である。一日平均日照時間は5.0時間、最高気温は7月下旬から8月2日位までに現われ、31～34℃、最低気温は1月下旬か

ら2月上旬にかけて現われ、-13～-17℃と、年格差が44～51℃と大きく内陸性を示す。夏の日較差が大きいことが落葉果樹の育成には利している。冬季の積雪は少ない。

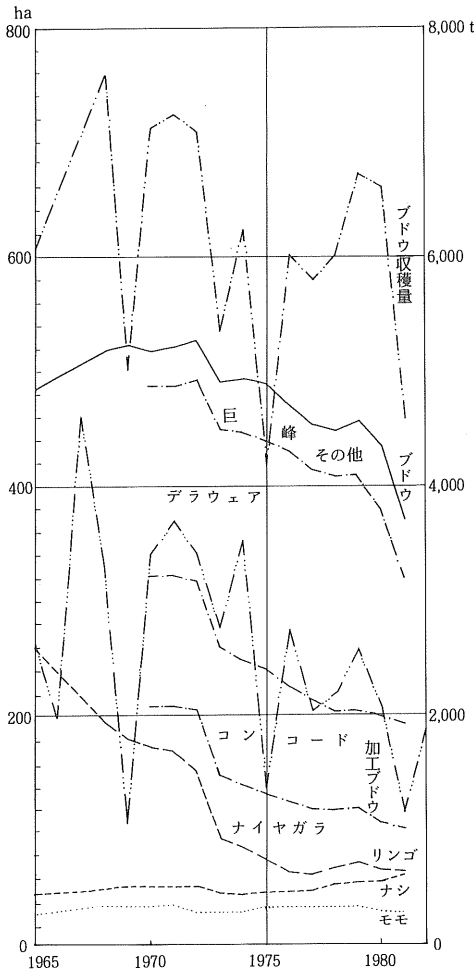
果樹園率は塩尻市全体では18.8%(1980)であるが、地区別では宗賀(40.8%)が高く、東部の山地の広い北小野(0.1%)・片丘(2.2%)が低い。農業集落の桔梗ヶ原と郷原の果樹園率は93.5%と40.9%である。

### Ⅲ-2 ブドウ郷桔梗ヶ原の経営構造

旧宗賀村にある農業集落桔梗ヶ原(第1図)を1980年農業センサス農業集落カードによってみると、面積は200ha、戸数366、人口1,264、第1次産業人口率25.8%、農家率32.1%である。農家97戸のうち専業農家率26.8%、第1種兼業率32.0%、第2種兼業率41.2%で、兼業の種類では雇用兼業60%、自営兼業13%であった。農家1戸当り経営耕地面積は1970年の90aから1980年には82aへ約1割減少した。果樹園は1970年の80ha、1975年78ha、1980年74haと漸減したが、樹園地率は1970年の91%から1980年には94%へ増加した。

97農家のうち72戸、74.2%が果樹単一経営、雑穀・いも類・豆類と養鶏の単一経営が各1戸1%ずつ、18戸18.6%が準単一経営、2戸2.1%が複合経営であった。農産物販売金額第1位の部門が果樹の農家は91戸、93.8%、他は養鶏2戸、雑穀・いも類・豆類1戸のみである。

借入地・貸付地ともに3ha程度と少なく、山林面積はha未満である。主要収穫作物としてはブドウ49.31ha、梨16.78haがあり、1戸当り農産物販売額266万円とほぼ純粋な果樹栽培集落である。(観光農園)ブドウは8月下旬から10月下旬まで、前半はデラウェア・ポートランド種、後半はナイヤガラ・巨峰・コンコードなどを客にもぎとらせる。入園料は大人・子供500円、幼稚園児250円払い、もいだブドウを種なしデラウェアは700円/kg、種ありデラウェアは500円/kgで土産として客が買って帰る。国道19号沿いには12軒、裏道に7軒の観光園がある。観光園は市場価格の23



第2図 塩尻市果樹栽培面積 (ha) およびブドウ収穫量 (t) 加工向ブドウ (t)

%を占める集出荷経費が節約できる点で有利であるが、店番の労働力が必要なことから、労力的に余裕のない経営にはできにくい。

### Ⅲ-3 ブドウの品種

塩尻市のブドウ栽培面積は1972年の527haをピークに減少し続け、1981年には370haにまでなった。リンゴはブドウ以上に一貫して減り続け、1965年に260haあったものが1981年には65haにまでなってしまった。代って梨が安定からやや増化傾向を示している(第2図)。

ブドウは他の果樹同様に天候に支配されて収穫量は年によって大きく変化する。1965年から81

年までの17年間では、1968年の7,590tを最高に、1975年の4,160tを最低として、約2倍の開きがある。それゆえ収穫よりは栽培面積で品種構成をみると、1981年にはデラウェア36.5%、ナイアガラ28.8%、コンコード25.9%、巨峰4.0%であった。1970年には桔梗ヶ原では伝統的なナイアガラが40.3%でトップであったが、以後10年経って絶対量では半分になった。デラウェアは1970年当時167haでナイアガラに次いで2位であったが、減少率がそれほど大きくはなかったので10年後には36.5%とトップに躍り出た。コンコードも減少率が小さかったので、相対的シェアを向上した。1972年頃から登場した巨峰は甘味が強くて大粒形のところからヤングに人気があり、10年間で4%の地位を確立するようになった。

ナイアガラ・デラウェア・コンコードの減少は1964年東京オリンピック以来輸入干ブドウに押され、さらには加工用が振わずに20%抜根された。洗馬地区はその間に野菜に特化していき、また矮化リンゴも栽培されるようになっていった。加工用高級品種を導入する努力は続けられ、北海道池田町から欧州種5種を入れ、さらに風土に合うと思われる清美など20種を下高井郡高山村の接木業者戸田に委託して準備中である。

### Ⅲ-4 出荷と加工

農林省統計情報部発行「昭和56年産果樹生産出荷統計」(1982年12月発行)市町村別結果面積・収穫量・出荷量によると、塩尻市は結果面積351haで4,600tの収穫をあげた。収量の94.1%を出荷、内訳は加工向60.5%、生食用39.5%であった。生食用1,709tの出荷先は指定消費地へ69.6%、県内24.9%、それ以外の県外へ5.6%であった。加工向出荷が著しく高いのが塩尻市の特色で、長野県全体の加工向出荷率19.3%と比べてみると3倍以上も高い。品種別加工向出荷率をみると、塩尻市のデラウェアは11.2%に過ぎないが、ナイアガラ・コンコードなどは79.7%の高率で、ほぼ醸造用品種と考えてよい。

加工原料ブドウの取引単価はkg当り1982年にコンコード90円、ナイアガラ60円、デラウェア45

円とほぼ6:4:3の比率である。この価格比も年によって異なることは言うまでもないが、コンコード・ナイアガラ・デラウェアの順序はほとんど変化がない。

塩尻市の果実の系統組織による集団出荷体制はかなり弱いと言われている。農林省の各種補助事業によって出果，流通施設が整備されてきている。具体例を挙げてみると，

1969年度果樹栽培省力化促進事業として宗賀桔梗ヶ原に管理用機械施設格納庫，1970年度同事業として金井に機械格納庫給配水施設管理用機械，1973年度果実出荷組織整備促進事業として宗賀桔梗ヶ原に共同選果施設，果樹新産地開発促進事業として広丘原新田に農業機械施設・苗木共同購入，1974年度大規模果樹生産流通基地整備事業として広丘・宗賀・片丘・塩尻に広域流通近代施設集荷施設，1975年度同事業として低温貯蔵施設・近代化施設，特認深耕用機械などである。

#### Ⅳ 桔梗ヶ原ワイン醸造業の展開

##### Ⅳ-1 ワイン醸造の開始

明治44年(1911)諏訪から入植した林五一が1919年にワイン醸造を開始して以来，70年以上の歳月が経ち，ワイナリー8社の美しいラベルのワインは塩尻市役所1階ロビーに展示されている。8社の名称と創業年次は次の通りである。

- 1919 林農園醸造部
- 1927 (株)アルプス
- 1930 霧ヶ峰葡萄酒醸造所
- 1932 太田葡萄酒(株)
- 1933 井筒屋葡萄酒醸造所
- 1936 (株)寿屋(現サントリー)
- 1938 大黒ブドウ酒(株)(現三楽オーシャン)
- (1943 塩尻高校酒類製造免許取得，農産加工研究開始)
- 1956 塩原食品(株)

8社のうち6社が昭和前半に創業された。1951年には12社あったので，4社は淘汰されてしまっている。甲州に比べて東京市場へ遠く，やせた土地と風土にはコンコード・ナイアガラの醸造に向

いた品種の方が適していたことが，ワイナリーの創設・誘致となり，農民のブドウ販路確保にあずかった。これはまた製品の付加価値を高めて出荷するという農業経済上の理にもかなっていた。

##### Ⅳ-2 ワイン醸造の現状

1981年国税庁統計書によると長野県には果実酒類製造免許場数は30，山梨県・大阪府に次いで第3位である。30のうち9が塩尻市内にある。しかし果実酒類の製成数量となると長野県は856klと青森県に次いで第10位に過ぎず，製造工場が相対的に零細であることを示している。

ブドウの収量が年による豊凶の差を反映して変動が激しいのと同様に，加工に向けられる原料ブドウの処理量も年によって大きな差がある(第2図)。加工ブドウの何%がワイン用かをみると，1973年の20%から1967年の76%までの変動がある。加工用ブドウのほぼ半分強がワイン用であるので，ワイン向けブドウの比率は10~35%程度と考えられる。1979年実績のワイン向けは16.6%であった。一般的には太陽の良く照った豊作の年はワイン向けの比率が高く，ジュース用が相対的に低くなる。

1982年度産加工用原料ブドウ取扱い量を塩尻市内7メーカーが市役所に提出した調書を集計すると(第1表)，2,274tのうち市内調達率は82.7%，17.3%は市外から各メーカー独自の努力で調達している。林農園(市内調達率66%)・サントリー(75%)・井筒屋(76%)などの市内調達率が低い。果汁用の市内調達率は97%であるのに，醸造用は72%と低いのは，ワイン用にはメルロー・カベルネソーヴィニオン・セーベルなどの醸造専用品種を主体に広く他から入れているためである。ワイン用対果汁用は全体では6:4，市内産のみではほぼ5:5で，市内産ブドウは相対的により多く果汁用に使用されている。

品種別ではコンコード65%，ナイアガラ23%，デラウェア5%，メルロー3%，その他が4%であり，とくにメルロー，その他の醸造用品種の市内の割合が低く，新品种への更新が塩尻市のブドウ農家の課題となっている。とくに高級ワインに



第1表 塩尻市内ワイナリーの1982年産加工用原料ブドウ取扱量

(単位: kg)

ワイナリー	調達地別	コンコード	ナイヤガラ	デラウェア	メルロー	その他	計	醸造用	果汁用
アルプス	市内取扱量	500,780	138,816	25,479			665,075	100,000	565,075
	全体取扱量	500,780	138,816	25,479	67,000	48,000	780,075	215,000	565,075
塩原食品	市内	175,000	130,000	45,000			350,000	110,000	240,000
	全体	175,000	130,000	45,000		15,000	365,000	125,000	240,000
サントリー	市内	244,000	64,000	8,000			316,000	316,000	
	全体	334,000	78,000	11,000			423,000	423,000	
三楽 オーシャン	市内	140,560	17,080	3,146		6,584	167,370	167,370	
	全体	179,000	17,570	3,996		6,584	207,150	207,150	
井筒屋	市内	101,673	48,879	6,122	2,759		159,433	92,952	66,481
	全体	125,659	61,581	20,374	2,899		210,513	127,735	82,778
林農園醸造部	市内	76,904	40,683	3,136	3,199	2,850	126,772	74,235	52,537
	全体	85,644	75,069	3,976	5,147	21,756	191,592	126,591	65,001
太田葡萄酒	市内	73,491	23,326				96,817	96,817	
	全体	73,491	23,326				96,817	96,817	
合計	市内	1,312,408	462,784	90,883	5,958	9,434	1,881,467	957,374	924,093
	全体	1,473,574	524,362	109,825	75,046	91,340	2,274,147	1,321,293	952,854
上記割合(%)	市内	69.8	24.6	4.8	0.3	0.5	100.0	50.9	49.1
	全体	64.8	23.0	4.8	3.3	4.0	100.0	58.1	41.9

(塩尻市役所農政課)

は専用品種の確保が不可欠の条件である。

販路は県外県内が52%対48%(1979)、酒類卸売店へ出すものが県内外合わせて54%、県内酒類小売23%を加えると78%になる。直販・ホテル・旅館などの最終消費者直結型は15%程であった。県外向けに原料移出が6%あったのは、大手メーカーのブレンドやボトリング工場への移出である。充てん容器は721ml以上(具体的には1升瓶)44%、761~720ml43%、360ml以下14%であった。1升瓶ワインのウェイトが高いことは日本ワインが清酒文化のヴァリエーションとして受け入れられているためと理解される。1ml当りコストは1,800mlを100とすると720mlが166、36mlが200と、大瓶の方が容器コストが小さいことも関係している。

7社の破砕機と搾汁機の能力は460~480t/日、発酵タンク・貯蔵タンクの能力は2,130tである。ワインの色別は赤48%、白42%、ロゼ10%である。搾汁率は赤が約80%とメーカー間の差が小さいのに対して、白は平均73%であるがメーカーにより65~77%と差が大きい。ワインとジュースの比率は先にみたようにほぼ半々であるのに、売上はワ

イン25億円(21%)に対し、ジュース94億円(79%)ではほぼ1:4の割合でジュースの売上の方が多い。夏季高温多湿な日本では清涼飲料としてのブドウなど果汁が好まれるためである。

ワイナリー経営上の問題としては労働ピーク時の労力確保と、従業員の若返りが必要である。発酵・熟成管理技術者は、4社が16名を雇用し、残り3社は経営者自らが技術者として家内工業的に指揮管理している。ワイナリーの収益性の面で5社は向上しているが、2社は横這いまたは低下傾向にあり、企業間格差が出てき、資金繰りに苦しむものもある。

#### Ⅳ-3 事例としてのワイナリー

〔事例1〕

株式会社アルプス、塩尻市内最大の処理量780t(1982)を誇っている。本社工場は塩尻市塩尻町260にあり、国道20号から南へ入った中央線北側にある。1927年大門524、新塩尻駅の地に先代がアルプス葡萄酒醸造所を創業したが、1974年現在地15,000m<sup>2</sup>に4,600m<sup>2</sup>の工場を拡大新設した。1947年天然果汁の製造にも着手、1955年連続真空低温濃縮果汁製造装置を設置し、ブドウ濃縮果

汁の製造に着手した。1962年個人経営から資本金500万円の株式会社へ改組し、果汁メーカーとしてのイメージが強くなってきたので名称を株式会社アルプスとした。1964年須坂市旭ヶ丘団地にも10,000 m<sup>2</sup>の須坂工場を新設してリンゴジュースの製造を始め、資本金を800万円とした。1971年資本金1,200万円に増資した。処理量780tのうち塩尻市内分は665t、メルロー、その他醸造専用種を115t移入しており、塩尻市内調達分を100とすると、外部調達率は17である。醸造用215t(27.6%)に対して果汁用565t(72.4%)で、3/4は果汁用であり、販売量の93%はジュース、7%がワインでワインのウェイトは低い。

原料ブドウは約400戸のアルプス生産組合員との契約栽培によって、優良品種の苗を提供する代わりに、糖度など品質管理を厳重にしている。従業員は塩尻工場40名、須坂工場19名、塩尻高校食品加工科の卒業生10数名を採用している外、実習生を受け入れている。地元産ブドウの他、ポルドーから原料ワインを輸入しブレンドしている。原料ワインをアルゼンチン・チリーなどからも輸入し、ワイン用原酒は3/4にも及んでいる。

莓・桃などのジュース製造も行い、大手メーカーの原料生産を行ってきたが、最近自社ブランドでも販売し実績をあげてきている。主な販売先は、長谷川香料株式会社を通じて乳業会社、ビール会社、その他大手食品会社に、それ以外に明治屋、紀ノ国屋、スーパー、三浦屋、中村屋、高島屋などへ出荷している。ワインは長野県酒類販売株式会社、(株)岡永、(株)小網などを通じて出荷している。

#### 〔事例2〕

1930年1月創業の霧ヶ峰葡萄酒醸造所は塩尻駅北西400m、国道19号に沿っている。前記塩尻市加工用ブドウ生産者組合連合会には入っておらず、当主松木義弘で2代目である。1960～67年までは東洋醸造の下請をやっていた。現在は夫婦2人で0.5haの成園と0.3haの未成園を経営し、普通畑0.5haは作付していない。成園ではナイアガラ・コンコードなど生食用を主に栽培し、10a当り約2

tの収穫をあげている。以前は1.5haも経営していた。原料ブドウの処理は年間約50t、原料ブドウは個人的に集荷し、購入価格は赤ワイン用コンコードがkg90円、白ワイン用ナイアガラが65円であった。50tのうち40tはワイン、10tはジュースにしている。製品は諏訪方面は個人的にレストランなどへ出荷し、東京・千葉・埼玉などへも小売に出している。県主催のデパートでの展示を機に大阪へも出荷し始めた。国道に面する観光園では母親が店番をし、土産物としての直売もある。

#### 〔事例3〕

県立塩尻高等学校は、その前身の東筑摩郡農学校時代の1943年に、酒類製造免許(果実酒6,000ℓ以上の製造販売)を取得した。1961年にトマト・ブドウなどの食品工業技術者養成のための食品化学コースが、1965年に食品加工科が設置された。校章と「KIKYO」ブランドで720ml瓶で販売している。製成量は4,000ℓ、原料は地元産のブドウ、ヨーロッパ系ブドウ、一部山梨園芸高校と大手メーカーの地元契約栽培種を使用している。さらに県農事試験場と連携して5aのヨーロッパ系ブドウの適性試験を実施している。

農業教育の実践として1年生にはブドウ栽培とワイン製造、2年生にワイン製造原理と技術、3年生に総合技術・管理を目的として一人一研究で地元ワイン向上の研究を課している。農業クラブ活動として全員に上級検定試験を受験させている。3年生の研究テーマ「ワインの品質に及ぼす気象と熟成について」の成果があがっている。その結果は「ブドウ」の糖度は8月の降水量と高い相関があり、雨が多いとアルコール度を低め、総酸は多くなり、エキス分は少なくなる。白ワイン(ナイアガラ)は熟成により味が良くなる、赤ワイン(コンコード)は熟成3年位が限度であること、などを発見した。

桔梗ヶ原のワインの質の向上には、①良質品種の栽培、②ブレンドによる品質向上、③製造技術の向上、などが考えられている。塩尻市「ワインのふるさとづくり」の一環として塩尻高校食品加工科教室で1980年から「塩尻市ワイン鑑評会(ワ

インキキ酒会」が開催され、塩尻高校生が統計処理など陰で手伝っている。出品者は前記8メーカーの他、塩尻高校・中信農業試験場産などがあり、5点満点で白・ロゼ・赤・生産年・品種別に評点されている。

## V おわりに

長野県のワイン消費量は1982年に全国12位に過ぎないが対1981年比では248と全国最高であった。県民1人当たり消費量は639mlで東京都(1,479ml)に次いで全国第3位で長野県のワイン文化はゆっくりと進行している。桔梗ヶ原は乏水性の洪積台地であったため周辺9カ村の入会地として利用されていた。明治22年(1889)豊島理喜治が1町歩にコンコード200本を植えて以来、ブドウを重点作物として開墾されてきた。山梨県との東京市場への位置関係、風土、酸性の強い土質などからコンコード・ナイヤガラなどの醸造適合品種が栽培され、これを処理するために1936年大手の寿屋

〔サントリー〕が誘致された。塩尻高等学校食品加工科の実習ワイナリーとその卒業生の地元ワイナリーへの就職、中信農業試験場などの協力によって桔梗ヶ原はワイン郷としての地域形成が行われてきた。

桔梗ヶ原の核心部では1経営当り80aほどの耕地でブドウの単一経営をしているものが7割ほど占めている。第2種兼業農家が4割程度と低く、未だ農業依存度は大きい方であるといえる。しかし着実に農地もブドウ園も時間とともに減少しており、ブドウの巨峰など優良品種への切り換えと、加工用ブドウの新品種の導入が待たれている。

甲州ほど長いブドウ栽培の歴史はないものの、ワイン生産では日本の一つの産地として成長している桔梗ヶ原は、輸入ワインの増大と大手ワインメーカーの寡占化という勢の中で、地元小メーカーは大手と共存しながらローカルワイン産地形成に努力している。

### 〔参考文献〕

- 宗賀村誌編さん会(1961):『宗賀村誌』  
東筑摩郡・松本市・塩尻市 郷土資料編さん会(1962):『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第3巻上.  
小林孝一(1965):加工資本と原料ブドウ生産地の発展構造. 経済地理学年報 10, 45~55.  
吉田芳夫(1974):『桔梗ヶ原』 塩尻市教育委員会.  
長野県企業合理化協会(1980):『塩尻市におけるワイン産業振興に関する調査報告』  
塩尻市経済部農政課(1983):『塩尻市の農業概況』.